

猿 橋
小学校

瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

何ができるか？ どうやったらできるか？

校長 澁谷 一男

真夏を思わせるような太陽と青空が顔をのぞかせたかと思うと、突然分厚い雲がそれらを覆い隠す。灰色の空は、下から上へ絵の具を塗り重ねたように、上空に行くにつれその濃さを増していく。紛れもなく梅雨の空である。

梅雨空とは対照的に、全国各地の観光地では賑わいが戻りつつあるという。いつまでも経済を止めておくわけにはいかず、移動自粛の緩和は必要なことと思う。しかし、ワクチンや抗ウイルス剤ができていない現時点では、現状は何も変わっていないことを確認しておくことも必要だろう。



新型コロナウイルスとの「共存」をいち早く提唱した京都大学の山中伸弥教授は、緊急事態宣言が解除された現状を「まだ青信号ではなく、黄色信号が点滅している状態」であり、ウイルス対策は「これからが本番」と警鐘を鳴らす。そして、「自分が感染しているかもしれないという前提で」、周りの人と『思いやり』の距離をとるなど、「正しい行動を粘り強く続ければ、ウイルスとの共存が可能となる」と説く。

個別懇談会の折、複数の保護者の方々から運動会開催を望む声があったと聞いた。保護者・地域の皆様が楽しみにしておられる1学期を代表する行事であり、当然のことと思う。運動会の中止は、私にとっても断腸の思いである。

言うまでもなく、どの学校行事にもねらいがあり、目的がある。学校行事を通して、子どもたちが大きく成長するのも事実だ。しかし、ウイルス感染のリスクが何も変わっていない現状では、秋に延期しても同じやり方での実施は困難だろう。形を変えた運動会の実施も検討したが、それでは本来の運動会の意義を満たすことはできないため、やむなく断念した。

運動会は中止にしたが、一方で「何ができるか？ どうやったらできるか？」という視点は大切にしたい。最後の運動会も親善陸上大会も中止となった6年生のために、何か思い出づくりはできないか、学習参観日も全校一斉では無理でも、分散参観なら可能ではないか…。ウイルスと「共存」できるようになるまで、全職員で知恵を絞り、教育活動を進めていきたい。

6年生が「学校のため、仲間のため、自分のため」に行動しようと「チャレンジプロジェクト」を立ち上げ、動き出した。子どもたちも、今「何ができるか」を真剣に考え始めている。